

精神分析のはなし 第9話

JAM：精神分析家にひとが会いにいくと、ひとはもうそこから出ません。よろしい、しかしそれは偏見です。今日はそういう理由で、ひとつの例をお話しましょう。3回のセッションからなる治療で、これ以上短くすることはできないような例です。ちなみに、もうひとつの偏見というのもあって、それはキャビネで働く分析家がいるが、そのキャビネはパリの、16区、あるいは6区か7区にあるのだろう。つまり美しい街にあるのだろうというものです。

それは本当のことでした。50年前はそうだったのですが、今はもう違います。精神分析はフランスで精神科医のたいへんな多数派に影響を与えました。またおなじように教育者たちや看護師たちもいます。したがって精神分析を参照する多くの実践家たちが存在していて、治療のための施設で仕事をしています。

精神分析家によって開かれたセンターも存在するほどです。いま私が参照するのは、無料のセンターで、スペインで開かれて、フランスでも存在しているところです。その施設で現在働く実践家たちは勇気がありますね。というのは精神分析に依拠する実践家たちがそこで提供しているのは、「そのひとにあった」治療です。もちろん精神分析が問題になっている場合、それは安売りではありません。

ですからそこには葛藤が存在しています。精神分析にインスピレーションを得ている実践家たちのあいだで存在する葛藤です。そしてそこでひとがしようとしているものは、プシの新しいカテゴリーから生まれるものです。

いわゆる行動主義者たちは、効果を得るためにおおざっぱな治療を試みます。その効果というのはしばしば一時的なものです。

今日はしかし、私はひとつの例をお話しようと思います。ごく最近、スペイン人の同僚が報告してくれた礼で、多くの人たちと討論したものです。この例を討論するのには200人集まり、ほかの例はまた多くのひとが集まりました。

マルタという女性の症例です。30歳で結婚しているマルタは、不安にさいなまれていました。3人のまだ幼い娘をもち、長女は8歳、下の子は2歳で、じつは分析家は3回しか会っ

ていません。しかしこの女性にとってそれは完ぺきな形のものでした。

初回、マルタは今の自分の状況を涙ながらに語りました。なにがあったのでしょうか？彼女は「数か月前に、私は目覚めたのです」と言いました。そのときまで、彼女は夫と娘たち中心に生きていたのですが、突然、彼女はその状況には耐えられないと理解したのでした。

つまり夫は身体的に彼女を虐待することはやめたのですが、ことばでは虐待し続けていたのです。彼はいつも、「俺がみじめな境遇から救ってやったんだ」とか、「お前は何の役にもたたない」、「お前にはなんの価値もない」と言っていました。

しかしこの女性にとって一番苦しかったのは、夫がその母親によって支配されていることでした。マルタにとって義母になるこの女性は、遠く、べつの国に住んでいたのですが、定期的に息子と電話で話していたり、よく自分たちの家に旅行に来ては数か月泊まっていたのでした。夫はというと、母親に相談しないではなんにもできない人でした。すべて彼女に報告していて、母親のほうは彼にすべきことをすべてを指示していました。

それでマルタは離婚がしたかったのですが、彼女には家族がなく、仕事もありませんでした。夫は、離婚をするなんてまったく馬鹿な奴だ、彼女は自分のことすら何にもできないじゃないかと言っていました。以上、マルタが初回に語ったことの要点です。

分析家は現在においてもものごとを考えるのではなくて、シンプルにひとつ彼女に問いかけました。「今までの人生で似たようなことはありましたか」、と。

するとどうでしょう？このひとつの問いかけは、じつはある反復にかかわっていました。マルタは 21 歳のときに、これはつまりスペインで当時成人に達している年齢ですが、彼女の母方の祖母をなくしたのだと語りました。この祖母が彼女を育ててくれ、つねに彼女の人生における支えだったのが祖母なのだと聞いたのです。

この祖母を失って、彼女は非常に具合が悪く感じました。そしてコカインをのみはじめ、勉強をやめて、彼氏とも別れてセラピーさえはじめました。そしてそのとき出会ったのが、のちに夫となる人物だったということです。

分析家は彼女に反復を気づかせるように導きました。彼女は祖母の死のときとおなじ状況に再び陥っているということです。つまり以前と同様に、今日彼女は、彼女自身のために行動することが肝心であるということです。祖母が亡くなった時にすでに、彼女は正当な成人たりうることを受け取ることが出来なかったこと、じつはその時とおなじ無力がこの新しい状況で生じているということです。

そして分析家は続けました。彼女の不安は、新たに責任というものを引き受けなければならないということを示し、不安は彼女の尊厳そのものなのだ、と。この不安はたんに機能不全だとか取り除かなくてはならないものではないのだ、と。そうではなくて、この不安は生きることの難しさを知らせていて、それを彼女はかつて経験したし、いまそれを尊重しなければならない、分析家はそれを尊重すると、伝えたのでした。

2回目のセッションでは、マルタはTシャツを着てきたのですが、そこには「no stress」と英語で書かれていました。この語「no stress」のなかに、スペイン語の「tres」を聞かざるをえません。この語はスペイン語で「3」を意味しています。たしかに、この夫婦のあいだでは、「3」の問題がありました。

彼女は二度目の反復の話をもってきました。それは、彼女が現在の年齢（30歳）であるときに、祖母もまた、3人の子をもつ未亡人となったことです。祖母は3人の子どもたちを育てるという重い責任を、当時担ったのです。そしてマルタ自身、3人の娘について語りましたが、その長女は望まれた子どもだったということです。つまり、ほかのふたりは、生まれたときに罪悪感をもったということでした。とくに二年前末っ子が生まれたときはそうでした。というのは夫がその末っ子の誕生のときおさなりな態度だったからでしたし、また彼女も義母にその世話をゆだねていました。それで彼女はこんなふうに物事を成り行きにまかせてしまったことについて、罪悪感をもっていたのです。

じつはそのとき、彼女がとるべき決心に近づいたのですが、彼女が言うには、経済的に自立するためにより一層強い人間と自分を感じる必要があるが、やむを得ない選択のまえに立たされていると理解しているとのことでした。

こうして3回目のセッションを迎えました。彼女は祖母について語りました。じつは祖母が彼女を育ててくれたのです。彼女はこの祖母との絆の力をよみがえらせて、祖母の死後、その墓まいりをしたのは家族で彼女だけだったことを思い出しました。3回目のセッションの

二日前、友達に彼女が泣いていると話したら、その子はマルタが泣いているなんていままで見たことないよと言ったのです。それでマルタははじめて、彼女が泣かなかったことを理解し、また愛する祖母が死んだときも泣かなかったことを思い出しました。あたかもその間、喪がなされず、宙づりになったままであるかのようなようでした。そして今日になって、なされてなかったその喪についての、なんらかの作業が行われるかのようなようでした。

また彼女は、たぶん仕事が紹介されそうだともしました。面接は、ちょっとした話—彼女のパパが、生まれ故郷を家族で訪問した際にみせた怒りにまつわる話—をして、セッションは終わりました。その後4回目のセッションはありませんでした。というのは、マルタは電話をしてきて、実際に仕事を紹介されたのもう来られないことを説明しました。彼女にまた来るように提案したら、ちかいうちに行きますと返事したそうで、その後来ていないとのことでした。

なにかが3回のセッションで行われました。それは不完全なものではありませんでした。あるとき、じつは、マルタは自分が第三者の役目を果たしていることに気が付いたのです。この夫婦においては、そしてこう言ってよろしければ、母はその息子と結婚していました。そしてマルタは、そこでおまけとして存在していて、夫にとって主要な絆は、夫自身の母親とをつなぐ絆のことでした。そしてマルタはおそらく、子どもを作るために必要な存在だったのです。

近親姦が禁止されているのですから。そして象徴的に言えば、母親と息子のあいだに近親姦が存在すると言えたでしょう。そしてマルタは第三者でしかありませんでした。そういう意味で、これはカップルではなく、3人組なのです。

ですから「3」という数字がここにあるのです。この人物は3人の娘を生んだあととはじめて、目覚めたのです。確認できますね。そしてそのあとどうなるのかを理解することができます。というのは、彼女はとても長い間この男性と生活をともにしたからです。なぜ女性は10年も12年も、母親と結びついている男性とともにいることを承諾するのか、問うことができます。

よろしい。それはおそらくマルタ自身もまた、同時期、こう言ってよろしければ、祖母と結婚していたからなのです。3回のセッションで、この間違ったカップルの構造のなにかがほどけたのです。じつはこのカップルにはふたつのカップルが隠れていたことが明らかになっ

たのです。母親とその息子であるマルタの夫、そして患者と死んだ祖母。このふたつです。

そして彼女はこの祖母とずっと、時が流れても喪のなかにいたのです。ですからじつは、その実践家、治療者は、精神分析について知っていたので、現在の問題を扱わなかったのです。たとえば、「ほんとうにあなたの夫は意地悪なのですか」とか、「そうは言っても、彼の母親が余計であると、夫に理解させる方法はありませんか」など、言うことはなかったのです。じつはそれらはすぐに状況が示す真実というものから把握できたことです。あの反復や、3回目のセッションで彼女自身が描いてみせた、花をもっていき墓参りをする唯一の人物であることとか。じつはその間ずっと、彼女は、こう言ってよろしければですが、祖母の機嫌取りをしていたのです。

明らかに、この治療は短くて完全なものだと考えることができるでしょうか？彼女が辿りうる逃走線をひとはよく理解できます。しかしフロイトは実際、分析とは構造から言って終わりのないものであると考え、無意識の解明には決して終わりはないと考えました。したがって、フロイトにとっては、治癒とはそのものとしてとても疑われるべきなにかとなります。

ラカンとは言えば、ラカンは分析には終わりがちゃんとあるという考えを持っていました。よろしい、この3回のセッションは小さなものです。しかしながら、この女性の人生において、肝心なものでした。しかもこの3回のセッションは、分析の終わる性格について考えを与えてくれるものです。まあ、かなり範例的ですからあるかたちで、ひとつの分析の最初のサイクルの終わりが、問題になっています。

そしてひとつの分析のなかに、このようなサイクルがたくさん存在しています。そして毎回、問いが分析主体に提示されます。利益を得たり、立ち去ったり、より遠くまで進んだりするのかどうかという問いです。ひとはつねに何度もサイクルを始めることができますが、しかし分析経験のサイクルはひとつひとつがその完成形をもっています。

ですから[マルタの場合]、里帰りした際の父親の怒り、というミステリーが残っています。父親は突然起こりだして、娘を侮辱しはじめたとのこと。よろしい。仮定としては、患者の結婚—母親と結びついたままの男性との結婚—は、じつは彼女の両親の結婚の構造を反復していた、というものです。つまり、彼女の母親はおそらく、あの祖母と結びついたままであり、患者の父親はそのことに苦しんでいたという仮定ですね。それは彼女自身が夫と義母との結びつい気に苦しんでいたのと同様のものです。

ですから、里帰り旅行の際に、この父親は娘を前にしてその威厳が保てなくなることに耐えられない思いがして、そのせいで彼女を侮辱したのだろうという想定が成り立ちます。しかし彼女が戻らない限り、精神分析家のドアを再びたたかない限り、彼女は語らないでしょうから、私たちにも分からないでしょう。